

衆生観への一視点

鍵 主 良 敬

一

仏教学上の重要な課題の一つに、衆生の本質についての論考がある。中国に於いて結実した大乘仏教の有力な成果としての華嚴教学では、種性論として論じられる分野に属するものであるが、一般的には如来藏自性清浄心として知られているものである。

要するに仏陀に於いて自覚成道された永遠普遍の眞実を迷える衆生が理解できるのはどのような能力を秘めているからなのか。また、何らかの意味に於いて衆生がその能力を保持していると認められたから、教法は説かれたのであるが、衆生の本来性であるといわれる自性清浄心とはどのような内容のものなのか。教法を聞く者に眞実を理解す

る可能性がまったくなければ、仏陀の自覚も自覚としてはたつきようがないであろう。眞実それ自体が如何に高遠無比であろうと、それに応ずる衆生の側にそれと同質の能力がなければ何の意味もないことになるからである。

ところで絶えず教法に接しているはずの我々の立場からしても、その眞意をそれほど容易に把握できないという現実がある。内に願みればみるほど、不変の眞理の揺ぎなきに對して我々の目の暗さが思い知らされる。またそれを他に伝えようとしても簡単に理解されていくものではない現実もある。

しかしそのような現実にもかかわらず、あるいはそのような現実であればあるほど、人類普遍の道理としての眞実が厳然として存在し、それに依つてのみ我々の目の暗さも

払拭されるということになれば、如何にしてそれへの応同力を我々の内に開発するか。また一見教法の道理に背いているようにみえる衆生の中に、どのような可能性を読みとって絶望しなくてすむか。それらの課題とも関連して自性清浄心についての究明が重要なものとして浮び上ってくることになるのである。

ところが不思議なことに、衆生心の本質を清浄なるものと認め、その可能性について全幅の信頼を置いていると思われる経論に、かえって厳しく衆生の迷妄を指摘しそれへの批判を怠らない面がある。たとえば如来蔵自性清浄心を主題とする経典として著名な『不増不減経』には

舍利弗、一切愚癡凡夫不_レ如_レ実知_一法界_二故、……起_レ邪見心、謂_レ衆生界増衆生界減。舍利弗、如来在_レ世我諸弟子不_レ起_レ此見。若我滅後過_レ五百歳、多有_レ衆生愚無_レ智慧、於_レ仏法中_二雖_レ除_レ鬚髮、服_レ三法衣_一現_レ沙門像、然其内無_レ沙門德行。如_レ是等輩実非_レ沙門_一自謂_レ沙門、非_レ仏弟子_一。(大正16・四六六b)

という指摘があるが、如何にも形骸化して形だけに墮してしまつた衆生の現実が、ここでは赤裸々に述べられているといつていい。表面上は確かに沙門の相をとつていながら、すでにその生命を失つて、仏の真意を理解することができ

なくなっているのである。

如来蔵自性清浄心といっても、實際は愚痴の凡夫なのである。その衆生の内に何ものにも汚されることのない根源的な意味での清浄性を認めようとするかぎり、一点の妥協を加えることもない衆生の現実への正しい認識から始まらねばならぬことは首肯されぬことではない。教法の真理性が如何に不変であろうとも、それと対応するものとしての衆生の実相は絶えず変化し、しかも墮落する危険にさらされている。だとすれば、その現実を正しく捉えてそこから出発していく以外に、教法の真理性を確認する方法は見当らないとも考えられよう。

しかも真実がないのではなく、それに触れながらそれに背いていく衆生があり、そこから墮落していく衆生がいるのである。愚痴・無智の実相として生々しくそのことが問題となっていくかぎり、衆生のそのような側面を見逃して、教法の真实性や自性清浄心を考えてはただの空理空論に終つてしまうことにもなるであろう。どのように墮落しどのように背いていくのか。できるだけ正しくその現実を把握する必要がある。

以上の如き観点から、大乘の諸経論に於いては衆生の現実をどのようにみていたか。そこへ視点を定めてこの小論

をすすめてみたいと思つている。

別教一乘といわれて如来の真実そのものを素材としたといわれている華嚴教学に於いても、それらの点が確かめられていないかぎり、単なる理想論に終つてしまう恐れなしとしないからである。

二

以上の論点を敷衍するために、先ず『智度論』巻第八に目を向けると、そこでは如来の神力は絶大であるのに、何故に衆生の方に解脱するものとしめないものとの差が生ずるのかという疑問が提示されていて、次のような問答がなされている。

問曰、若_レ仏有_二如_レ是大神力、無_レ数千万億化仏、乃至十方説_二六波羅蜜_一、度_二脱一切_レ、尽_レ得度_一、不_レ應_レ有_レ殘。

答曰、有_二三障_一、三惡道中衆生不_レ能_レ解_レ知_一。……皆不_レ能_レ聞_レ不_レ能_レ知。

問曰、諸能聞能知者、何以不_レ皆得_レ道_一。

答曰、是亦不_レ應_レ尽_レ得_レ道_一。何以故、結使業障故。有_レ人於_二結使重_一、常為_二結使_一覆_レ心。以_レ是故不_レ能_レ得_レ道_一。

(大正25・一一六b)

最初の問いは、仏の大神力がそれほど優れたものである

ならば、すべてを度脱し衆生をことごとく証悟の世界へ度し得るのであって、それに洩れるものはあり得ないはずであるとの意である。それに対して、三惡道という三種の障りの中にあるものは、教法を聞き理解することができないと答えているのである。

それに反問して、能く聞き能く理解してもすべてのものが道を得るわけでないのはどうしてであるかというのが次の問いである。その答えは、煩惱や業の重いものはそれによって心を覆われているために得道することはできない。いわばすべてのものが道を得るわけではないのである。

要するに煩惱に覆われることのない心こそ得道するのである。覆われ汚れている心が道を得ることはないという当然の理解が、ここにはあるということになる。したがってそれに引続いての『智度論』の議論では

当_レ今衆生在_二惡世_一、則入_二三障中_一、生_二在_レ仏後_一、不善業報、或有_二世界惡罪業障_一、或有_二厚重結使障_一。……如是等展転互有_二厚薄_一。是結使障故、不_レ聞_レ不_レ知_レ化仏説法、不_レ見_レ諸仏光明、何況得_レ道。譬如日出盲人不見、便謂_二世間無_レ有_一日月、日有_二何咎_一。又如雷電震_レ地聾人不_レ聞、声有_二何過_一。今十方諸仏常説_二經法_一、常遣_二化

仏_二至十方世界_一、説_二六波羅蜜_一、罪業盲聾故不_レ聞_二法_一。以_レ是故不_レ見_二聞見_一。雖_レ復聖人有_二大慈心_一、不_レ能_レ令_二皆聞皆見_一。若_レ罪欲_レ滅福將_レ生者、是時乃得_レ見_二見_レ仏_一聞_二法_一。(大正25・一一六b~c)

と述べて、盲人が日光を見ず聾人が雷鳴を聞かないからと
 ① いて、それが日光や雷鳴の過咎とはならないように、常
 に説かれていた諸仏の経法も罪業の厚重のために見えな
 かったり聞こえなかったりすることが起り得るのである。し
 たがって仏陀もしくは菩薩が大慈悲心の故に一切衆生を解
 脱せしめたいと念願しても、すべてがその教法を見聞する
 ことはあり得ないとしている。

罪業を減したいと欲しているもの、または福德を生ぜし
 めたいと念じているもののみが、仏法を見聞できるといえ
 る。罪を滅し福を生じたいと欲している心こそ、それに応
 えようとしている教法を見聞し得るのである。そのような
 心のないものが仏の教法を見聞し得るものではない。その
 ことは、教法に過咎があつてのことでないのは当然のこと
 であらう。

それ自体に於いて清浄性を保持している心があるとすれ
 ば、それはそれ自身の必然的はたらきとして、罪障を滅し
 福德を生ぜしめたいと欲する心であるともいえる。それ故

その心があるものは誰でも仏の教法を見聞し得ることには
 なる。しかしすべての衆生が見聞するわけではないという
 条件がついているところからみれば、あらゆるものに清浄
 心があるわけではないとするか、あるいはその心が結使に
 覆われ過ぎていて無に等しい状態に陥っているというのが、
 この文の意味するところであるといわねばならない。

このことは『智度論』巻第一で論じられる因縁觀をめぐ
 ったの次のような問答に於いても裏づけられると思われる。
 即ち愚癡の人は因縁法を觀することによって解脱に至るこ
 とができるといわれるが、因縁法というものは甚だ深遠で
 解し難く覚り難いものではないのか。よほど能力のある細
 心巧慧の人でなければ理解できないものであらう。愚痴の
 人は浅薄な教えでさえも十分に理解し得ないのに、どうし
 てその人に甚深な因縁法を觀じて悟りに至るべきであると
 勧めるのか、大変無理な問題の設定になりはしないかとい
 う問いが提出されるのである。それに対する答えは

答曰、愚癡人者、非_レ謂_二如_レ牛羊等_一愚癡。是人欲_レ求_二
 実道_一、邪心觀_二故生_二種種邪見_一。如_レ是愚癡人当_レ觀_二因縁_一。
 是名為_二善对治法_一。(大正25・六〇b)

となつてはいるが、要するに愚癡の人といつても牛羊の如き
 まったくの愚癡をいうのではなく、真実の道を求めていな

がら邪心によつてものを観るために種々の邪見を生じている人のことである。そのような人は因縁法を觀ずることによつてこそ、自らの邪見を対治することができるといふのである。ここでもまったくの愚癡は論外とされている。眞実道を求める心が已に前提されていて、それが邪心によつて曇らされている場合にこそ、その曇りを取除くために正しい觀法が必要であるとされているにすぎないのである。

以上のように、眞実の法を理解しそれに応同するために、眞実の心がなければならぬのであって、それのないところでは眞実もはたきようがないのである。ではそのよくな眞実心は如何にして生み出されるのか。あるいは邪心で觀じられた因縁法が、はたして眞実のはたらきをなし得るのか。またまったくの愚癡なるものを解脱せしめんとする仏陀の大悲心はどうなるのか。その他さまざまな問題がこの一点をめぐつて展開してくるのであるが、それらについて『智度論』は必ずしも明確な解答を与えていないといふことになる。問題への視点がそこにあるのではないことから見ても當然のことではあるが。

三

眞実を理解し得るものと理解し得ないもののあることを

暗黙の内に認めざるを得なかつた『智度論』の考え方は、如何なる衆生にも眞実に応ずる可能性のあることを主張しようとする仏性もしくは如来藏心を主題とする諸經論に於いて、かえつて逆の形で問題にされることになる。つまり眞実に背くものとはどのようなあり方をしてるのであり、どれだけの分類が可能であるかがはっきりと規定されることになるのである。

自性清淨心はそれのみで明確になるというものではない。清淨と対応するものとしての染法を明らかにしなければ、それ自身もはっきりしてこないのである。その点からみて仏性、如来藏心に関心をもつ經論が、かえつてそれとは反對の、衆生の迷えるあり方を浮き彫りにしたことも首肯されぬことではない。

以上の観点からその一例を『仏性論』卷第二にみると、そこには「三種の衆生」という概念があつて、甚だ興味深い定義がなされている。もちろんこのような分類は世親の獨創によるものではない。この系譜に属する一連の經典の一つである『無上依經』^②に依りながら、多少整理を加えたものであり、その趣旨は後に『究竟一乘宝性論』^③にもそのまま採用されるものである。次の所説がそれである。

若略說世間有三種衆生、一樂_二生死恒有、二樂_二滅_二生

死有^一。三両俱不^レ樂、有滅並忘。

一樂^二生死有^一者、復有^二二種^一。一憎^三背解脱道^一、無^二涅槃性^一、快^三樂生死^一、不^レ樂^二涅槃^一。

二已墮^二定位^一、定位者非^レ聖非凡、進退無^レ取而是仏法内人、背^二大乘法^一。(大正31・七九七b)

第一の生死の有を樂うものは、二種に分けられる。その一は解脱道に憎背して涅槃性なく、生死を快樂して涅槃を樂わざるものであるとされている。いわば死に帰する生でしかない現実の直中にありながら、目前の快樂にのみ溺れて真の安らぎである涅槃を希求しないものことである。根底から解放されて真の自由を獲得する道としての解脱道を提示されることが偶々あるとしても、かえってそれを憎悪嫌厭してそれに背き、一時的なものではないあやふやな現象の虜囚になっている凡夫そのものことであると解されよう。

次にその二は、同じく生死の有を樂うものの中に入りながら、一の解脱道に背くものに対して已に定位に墮せるものであるとされている。この場合の定位とは、ある意味での価値ある立場に立ちながら、そこに滞ることによってその中に埋没し、かえってその価値が逆の作用を及ぼす状態になっているものことであろう。誤ったはたらきをなす

優れた能力は、無能よりも危険である例は屢々みられるものである。つまり生死の中に墮在することは論外であるにしても、それを超えるものとしての聖位の中への墮在もまた恐るべきことである。それは已に仏法に触れることによって凡位を超えながら、そこに停滞して進取進退を失い、なおかつその立場に固執して、ある意味での有を樂うものとなっているのである。大乘の法に背くものであるといわれるのは、そのためであると思われる。

『無上依經』では

於^二我法中^一不^レ生^二渴仰^一誹^二謗大乘^一。(大正16・四七一a) となっているが、端的にはそういうことであろう。

したがってそれらのものに対して、仏は次のように説かれるとされている。

我非^二是其師^一、其非^二我弟子^一。舍利弗、此人從^二輕暗^一入^二重暗^一、復從^二重暗^一入^二於盲暗^一、取^二暗為^レ友、復取^二闇提^一為^レ友。是故我說此人如^レ是。(大正31・七九七b)

ここには仏陀といえどもどうしてみようもないものが挙げられているといえる。教化しようとするれば教化できるといふような生易しいことではない。如何に真実を説いても、それに背きそれを憎むすべしかないものに対しては、師弟の關係は成立つはずもないことである。そのようにして輕

暗から重暗へと歩を進め、深まりこそすれ決して晴れることのない闇の中へさまよい出し、その暗に親しみ、そこに生きることを良しとするものに近づくことで自らの立場を補おうとするもの。そのようなものに対しては、如何なる手段も無効となるのは当然の帰結であるといわねばならぬであろう。

以上のごとき衆生の第一類型に対して、第二の衆生は生死の有を滅せんと楽うものといわれて、次のように記されている。

二樂_レ滅_二生死有_一者有_二二種_一、一墮_二非方便_一、二墮_二方便中_一。就_レ墮_二非方便_一復有_二二、一外道、謂_二九十六種_一。二

是仏法内人、与_二外道_一同_レ執。約_二正法_一起_二邪執_一我見_一故、於_二正教義_一不_レ能_二了達_一。因_二此人_一故、仏説_二是言_一、若不_レ信_二樂真空_一、則与_二外道_一無_レ異。(大正31・七九七)

即ちここに述べられる衆生は、生死の実体を知らずそれに欺かれてその恒有しか楽うことのできない第一のものに比すれば、その虚妄性に気づいてその滅を楽うという点で数段上の階程に達しているものといえることができる。しかしそのような状態にあっても、その目的を達するための手段即ち方便に於いて、それに墮する危険の中にあるものことである。いわばそのような方法に依っては決して生死

の有を滅することはできないのに、あえてそれに依ろうとするのである。その点が非方便に墮するものとされる理由なのである。

これも二種に分けられているが、その一は九十六種の外道といわれるものである。外道は、道理としても方法としても誤っているにもかかわらず、その方法によって生死を滅せんとするのである。目的は正しくとも方法が誤っているものことである。道にはずれながらも九十六種といわれるほどに多くの誤った方法が、我々の前に提示されているのだということであろう。

次に仏法の内にありながら、外道と執を同じくするものについて述べられる。正法に対して邪執の我見を起すことによつて、結局正教の道理に了達できないものも非方便に墮するものであるとされるのである。独尊と独断とが似かよった面をもちながら白と黒ほどに異なるように、正法の内にありながら、衆生を正しく導くものとしての教法に対して独断にすぎない邪見を懐くことによつて、外道と同じ状態に陥ってしまうものことである。方法は正当であるにもかかわらず、その方法を生かす主体の側で誤ったものを見方をすることによつて、その方法が意味を失ってしまったのである。そして方法それ自体の誤りと同じ結果になっ

てしまうのである。

以上のように仏法内にありながら、外道と等しくなるとされる誤った主体のあり方には、もう一つ増上慢^⑤の人も含まれるとされている。次のものがそれである。

復次有_二増上慢人_一、取_レ空為_レ見、是真空実解脱門。約_二此空解脱門_一、起_二於空執_一。謂_二一切有無並皆是空_一。此空執者即無_二所有_一。無_二所有_一故因果二諦道理並失、執_二此空_一過故即墮_二邪無_一。是等執者由_レ空而起、故成_二邪執_一。一切邪執、莫_レ不由_レ空故能滅除。此執既依_レ空起故不可_レ治。(大正31・七九七b)

縁起觀の真髓である空觀は、それによって解脱に至るものである。ところがそれを獲得したことに酔いしれて増上慢を起すものがあるというのである。正しいはずの空觀に取著しそれに執われるところに、抜きさしならぬ自己撞着が生じてしまうともいえよう。眞實の空觀は、空であると主張する無用の固執をもそれ自身で否定して、静かにあるがままにものを見、そこに立って歩みを進めていくものである。しかし空執は秀れたものの見方を手に入れたことに驕って、かえって虚無の中へ陥ってしまうといえよう。

そこでは有と無を單純に否定することによって、具体的事実としてある因果の關係や眞俗二諦の道理をも見失って

しまうことになる。ものを固定化し抽象化してみる有見を否定するところに空觀があるのであるから、それは否定を通ずることによってかえって生きた事実としての現實を甦らすものである。そのようなものの見方を確立するところに眞の空觀があるにもかかわらず、逆に固執の中に沈んで身動きできなくなってしまうものがあるのである。

それが邪無といわれる空執である。そしてその意味での執見は、空に由って起るが故にかえって始末におえない構造をもってしまうともいえる。銳利な刃物はものを切ることに優れているだけに、誤って用いられると危険極まりないようなものである。空執はそれを治する方法が見当らないほどに危険であるといわれるのはその意味に於いてであると思われる。左の仏説^⑥が注目されることになる理由も肯かれないことではない。

故仏語_二迦葉、若人起_二我見執_一、如_二須弥山大_一、我亦許_レ之。何以故、以_レ可_レ滅故。若此増上慢人所_レ起空執、猶如_二髮端四分之一_一、我急呵責決定不_レ許。(大正31・七九七b)

我見を起すことが肯定さるべきでないことは、いうまでもないことである。しかし須弥山ほどに巨大な我見でも、まだ滅し得る可能性があることによって許容し得るとして、増上慢の人の起した空執は毛髮の四分の一ほどであっ

でも決して許すことはできないとされている。それほどに空執は恐るべく治し難いものであるということである。そしてこのような警告がなされなければならないほどに、手に入れた鋭利な刃物の切れ味を楽しみ過ぎて、かえって自己撞着に陥っていた事実があったということであろう。そのことが空執の普遍的な意味に於ける弱点として指摘されているのだと思われる。

次いでこの論で問題にされている、方便中に墮するものとしての一声聞人、二独覺人、及び第三の俱不樂者である修行大乘最利根人については、この小論での視点から多少はずれる面があるので細説は省略する。

四

『仏性論』に代表される以上のような衆生観に対して、華嚴教学に於いてはどのような見解が示されているであろうか。

『華嚴經』は究極の眞実を説くものであるから、「一切一切即一切」の道理に体達できる普法の菩薩のみが対象となるとされている。それ故声聞もしくは縁覺、あるいは三乗共教の菩薩さえも対象にはならぬ面があるのである。そこに眞実が眞実そのものとして提示され、深遠が深

遠そのものとして存在することの意味があるのである。

それは方便もしくは応同を無視していることではない。眞実それ自身の絶対性がそのものとして自律的に成立してはじめて応同も方便も可能となるのであって、それを欠落させたところでの方便は決して方便としての作用をなし得ないことを示しているのである。その意味で『華嚴經』が根源であるとする主張が成立してくるのである。ではその經に対しては、声聞や縁覺以下とも思われる凡愚の衆生は、どのような位置づけがなされるのであろうか。

その一例を賢首大師法藏の所説の上でみることにすると、『探玄記』巻第一に述べられる『華嚴經』の教所被の機についての論述に注意せしめられる。そこに於いて法藏は、『華嚴經』を受持する資格のある者五位と、資格のない者五位について述べているのであるが、資格のないとされる五位の内の前三が、衆生の現実を厳しく断定したものとと思われる次の所説である。

一違_レ眞非器、謂不_レ發_レ菩提心、不_レ求_レ出離、依_レ傍_レ此經、求_レ名_レ求_レ利_レ莊_レ飾_レ我人、經非_レ彼_レ緣_レ故非_レ其_レ器。……
 二背_レ正非器、謂詐現_レ大心_レ偽修_レ邪善、近感_レ人天_レ終不_レ成_レ仏、恐墮_レ阿鼻地獄_レ多劫受_レ苦。……三乖_レ実非器、謂雖_レ不_レ巧_レ偽、然隨_レ自執見_レ以取_レ經文、遂令_レ超情至

教廻不入心故成非器。……此上三位俱是凡愚衆生境界。下云、此経不入一切衆生之手、唯除菩薩。良以此経非是衆生流転之縁、故不入手。

(大正35・一一六)

第一の違真の非器は、菩提心を発すことのないものであり、したがって出離を求めるともないものである。眞実を説く経である此の経を傍にしながら、その趣旨とは根本的に異なる名利を求めて、人我を飾ることのみに専念しているものことであるといわれている。要するに法には触れていながらそれに反して自我の拡大のために教法を利用してしているものことであって、眞実の教法の成立つ根拠ともいべき菩提心をも出離の意欲をも欠落させているものということになる。流転の現実の中に埋没して、それを超克する力に違反し、その汚れに没している足の深さによって、清浄なる教法を決定的に汚してしまふものことなのである。

それに対して第二の背正の非器は、菩提心を現わすことのない第一のものに比べれば大心を現わしているのであり、名利に対すれば善を修しているものである。しかしその大心が詐りにすぎなく、善が邪善でしかなく、そこにかえって問題を孕むことになっている。それが一応は大心であり

善であることによって、三惡道に対すれば人天の果報を感ずるだけの内容があるのであるが、所詮は詐偽にすぎないことよって、究極的には無間地獄に墮し多劫に苦を受けなければならぬことになっているのである。目前の利益に目をうばわれて眞の意味での利益を失っているものことである。

次に第三の乖実の非器は、巧みに偽って大心を発したり邪善を修したりするのではないが、それ自身の無意識の執に随うことよって、その立場に立って経文に取著するものである。本来、衆生の妄情を超え出たものである教法を、自らの執心を基にして採断するために、遂にそれを理解することのできないものことである。それを論証するために『十地経論』の言葉として法蔵が引用した次の文は、その辺の消息をかなり適確に示し得ていると思われる。

地論云、聞作聞解不入得聞。又如随声取義五種過失等。(大正35・一一六)

一応聞いているようにみえながら、その意味を理解できなければ聞かなかつたのと同じであり、ものの表面だけに執われてその眞意を捉えられなければ、かえって過失を感ずるといふのは重大な指摘であろう。しかもそれが自覚されないところで誤られているだけに面倒なことにもなつて

いる。

以上のような過誤を犯し、そのような傾向性の中で流されていくものが、これまでに検討してきた三種の衆生の現実である。したがって迷妄に流転しつづめる凡愚の衆生にとっては、この経は入手できないものとなるというの^⑧が、ここでの法蔵の結論となっているとみてよいのである。

右のごとき衆生観は、すでに注意したように決して衆生を否定的にみているということではない。あくまでもその現実をありのままにみて、事実として評価したものにならないのである。事実がその通りであるならば、それを過大にみることもまた過小にみることもないわけである。

由_レ智能離_ニ増益損減_ニ辺過失_一。如_レ此正修_レ通_ニ達所_一。
縁如実諸相。(大正31・一一三c)

といわれる『撰大乘論』の所説によるまでもなく、増益と損減との二辺の過失を離れて、対象となった衆生の如実の諸相を正確に把握する必要があるだけなのである。

どのようなみても、そのようなあり方しかしていないものが現にある衆生の実相であるとするならば、その事実は事実そのものとして認められなければならないであらう。可能性のあるものはあるのであり、ないものはないのである。その限界を曖昧にして接点を消滅させるということではな

い。どこまでも明確な一線を画しながら、なおかつその差異を超えて対立や区別に左右されない衆生それ自身の本性が見出されるか否かの問題である。

それが明らかになって、一見仏の教法に背いてまったく涅槃への志向性を失っているようにみえる衆生の内にも、その本質に於ける自性としての清浄心を確認し得たからこそ、力強い説得力をもってそのことが主張されてくるのであると思われる。清浄心の対極にある愚癡無智の凡夫の現実の上に、如何なる汚れにも汚されることのない不変の本性を見通し、そのゆるぎない確信を踏まえて経説を展開させたところに、自性清浄心を標榜する経論の生み出されてくる必然的根拠があったのではなからうか。

註

① この譬喩は智度論卷第九(大正25・一二六b)にも同趣旨のものがあげられている。「衆生罪重故、諸仏菩薩雖_レ来_レ見、又法身_ニ常放_ニ光明_ニ常説_ニ法、而以_レ罪故_ニ見_レ不_レ聞。譬如_ニ日出_ニ言者_ニ不_レ見、雷霆_ニ振_レ地_ニ聾者_ニ不_レ聞。如是法身_ニ常放_ニ光明_ニ常説_ニ法、衆生有_ニ無量劫_ニ罪垢_ニ厚重_ニ不_レ見_レ不_レ聞。如_ニ明鏡_ニ淨水_ニ照_ニ面_ニ則_ニ見、垢_ニ不_レ淨_ニ則_ニ無_レ所_ニ見。如是衆生_ニ心_ニ清淨_ニ則_ニ見_レ仏、若_ニ心_ニ不_レ淨_ニ則_ニ不_レ見_レ仏。今雖_ニ有_ニ十方_ニ衆_ニ及_ニ諸_ニ菩薩_ニ来_ニ度_ニ衆生_ニ、而_ニ不_レ得_レ見_レ」。

② 無上依経卷上(大正16・四七一a~b)に次のようにある。

「世間中有三品衆生、一者著有、二者著無、三者不著有無、著有者復有二種、一者背涅槃道無涅槃性、不_レ求涅槃、願衆生死。二者於我法中不_レ生渴仰、誹謗大乘。阿難、是等衆生非_レ仏弟子、非_レ大師、非_レ婦依処。……著斷無_レ者亦有二種、一者行無方便、二者行有方便、行無方便復有二種、一者在_レ仏法外、九十六種異学外道。……二者在_レ仏法中能生信心、堅著我見不_レ愛正理、我說此人同_レ彼外道。」

③ 究竟一乘宝性論卷第三(大正31・八二八c)参照。

④ 不增不减經(大正16・四六七c)には「舍利弗、若有比丘比丘尼優婆塞優婆夷、若起一見若起二見、諸仏如来非_レ彼世尊、如是等人非_レ我弟子。舍利弗此人以起二見、因縁故、從_レ冥入_レ冥、從_レ闇入_レ闇、我說_レ是等名_レ一闍提。」とあり、前掲の宝性論にはそのまま引用されている。

⑤ 無上依経卷上(大正16・四七一b)「復有増上慢人、在_レ正法中觀_レ空、生_レ於有無二見。是真空者、真向_レ無上菩提一道淨解脱門、如来顯了開_レ示正説。於_レ中生_レ空見、我說_レ不可_レ治。」参照。

⑥ 前同「阿難、若有_レ人執_レ我見一如_レ須弥山大、我不_レ驚怪亦不_レ毀訾。増上慢人執_レ著空見、如_レ一毛髮作_レ十六分、我不_レ許可。」参照。

安樂集卷上(大正47・八b)にも「無上依経云、仏告_レ阿難、一切衆生若起_レ我見一如_レ須弥山、我所_レ不_レ懼。何以故、此人雖_レ未_レ即得_レ出離、常不_レ壞_レ因果、不_レ失_レ果報故。若起_レ空

見一如_レ芥子、我即不_レ許。何以故、此見者破_レ喪因果、多墮惡道、未來生処必背_レ我化」とあり、十二門論宗致義記卷上(大正42・二一七c)にも「若此無者、則是斷無惡取空見、甚為_レ可_レ畏。經云、寧起_レ有見一如_レ須弥山、不_レ起_レ空見一如_レ芥子、許」とある。

ちなみに前掲の宝性論(大正31・八二八c)では「宝積經中仏告_レ迦葉、寧見_レ計_レ我一如_レ須弥山、而不_レ用_レ見_レ憍慢衆生計_レ空為_レ有。迦葉一切邪見解_レ空得_レ離。若見_レ空為_レ有、彼不可_レ化令_レ離_レ世間_レ故。」とあつて大宝積経卷第百十二(大正11・六三四a)の次の文を引用する。「若以_レ得_レ空便依_レ於空、是於_レ仏法則為_レ退墮。如是迦葉、寧起_レ我見積若_レ須弥、非_レ以_レ空見_レ起_レ増上慢。所以者何、一切諸見以_レ空得_レ脱若起_レ空見則不可_レ除」。

これらの文から見れば、仏性論に引用された無上依経中の迦葉は、宝積経との混同であると思われる。

⑦ 十地経論卷第一(大正26・二二八c)「若聞則迷悶者、云何迷悶、隨_レ聞取著故、聞者即聞非_レ是不聞」。同卷第二(二二三c)「我復説_レ此、汝等不_レ應_レ如_レ声取_レ義、隨_レ声取_レ義有五種過、一不正信、二退勇猛、三誑他、四謗仏、五輕法」。

⑧ 華嚴経卷第三十六(大正9・六二九c)六三〇a)「仏子如_レ是經典、但為_レ乘_レ不思議乘、菩薩摩訶薩、一向專心求_レ菩提者、分別解説不_レ為_レ余人。何以故、此経不_レ入_レ一切衆生之手、唯除_レ菩薩。」(本学教授 仏教学)